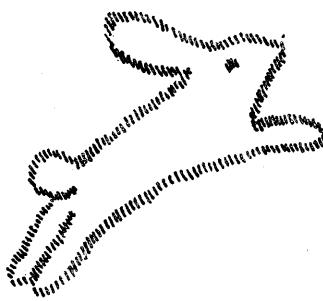


父と子

蕪木寿江



「お父さん、おもちゃを買ってあげるって言うけど、お母さんが怒るから、お誕生日まで待つんだよ。いっぱい買ってもらうんだ。」

「お父さん、力があるの。筋肉も入っているんだよ。眼

鏡かけているけど寝るときはとるよ。焼鳥とビールとお酒と、普通の白いごはんが好きなんだよ。」

「お父さんがお父さんで、わたしがお母さんになって遊んでくれるの。会社から帰ると、すぐお酒呑むんだよ。」

「お父さん、お土産にケーキを三つ買つてくるの。いつも自分は食べないんだよ。」

「会社へ行く時、何回もお母さんに起こしてもらうの。お母さんと仲良しなんだよ。」

「お父さん、あまり遊んでくれないの。小さい時は遊んでくれたんだけど……。」

「日曜日には、サッカーとか野球してくれるの。お風呂に入るとタオルでブクブクのやり方を教えてくれるの。」

キャベツの上に、マヨネーズとトマトケチャップの混ぜたのをかけて食べるのが好き。僕も同じのが好き。」「お母さんの悪口言つたり、ぶつたりすると怒るよ。部屋の中でドンドンしたり、トイレのドアをガッチャーンとおもいきりやると怒るよ。下の人間に叱られるって……。」

「お休みはゴルフに行つちやうの。一回連れてつてくれたの。その時ジュース買つてくれたの。」「長四角の顔をしていて、眼鏡をかけていて、口も鼻も大きいの、サッカーが好きで好きでしょうがないの。い

つもお兄ちゃんに教えているんだよ。選手にするんだって。だからあたしとはあまり遊ばないの。怒るときは眞剣に怒るけど、やさしいときもあるよ。」

「土曜日と日曜日でないとときはいつもマラソンをしてるの。時どきお土産に、ミルクキャラメルを一つか、二つ残して持つてきてくれるの。」

「会社から帰るとすぐペジャマに着がえるの。お休みの時もすーっとペジャマでいるよ。」

「火曜日と金曜日がスイミングでしょ、土曜日がヤマハでしょ。水曜日が英語にいくの。お父さん、くもんも習えって言うんだよ。」

「お父さんの好きなのは、トマトと僕なんだよ。」

父の日も近く、プレゼントの肩たたき券をつくりながら、子ども達の話はつきない。

「トマトと僕……」色黒で、食べる割には瘦せっぽちのFちゃんが得意そうに言う。「いいわねえ」としみじみと顔を見る。

何年か前に、ボソボソと話した幸成ちゃんの言葉を思
いだす。

「お父ちゃん、蚊にさされると、かいてくれるの——。」

それ故に暖かい座を、放棄してしまっているようでな
らない。物に覆われているところには、新鮮な感動は育た
ないだらう。

私は心の奥に藏つてあるこの言葉に、ときどき出会つ
てみたくなる。

幸成ちゃんのお父さんに逢つたことが、たつた一度だ
けある。大工さんで建前の帰りかなにからしく、仕事着

のまま夕暮れの町を赤い顔をして、仲間と二、三人で歩

いていたのをすれ違つて会釈した。私はぶり返つて後姿
を見送つていた。この言葉をとっさに思いだしたからで
ある。蚊にさされてぷくっと小さくふくれたあとを、節
くれだつた指でさりげなく搔いてあげた父親——。よつ
ぽど気持がよかつたのだろう。それを喜びとして受け止
める子ども——。父と子……、そしてその背景……。

物質文明に容姿だけでなく、心も触ばまれて いる現
在、その歪ひずみを一番受けて いるのは子ども達だと言われて
いる。

「子どもが喜べばいい——。」と、甘えさせるのではなく
甘やかし、いたずらに玩具を与え過ぎたり、物で心をこ
まかすご機嫌とりの父親は、自ら父という厳しい座を、

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)